

日本音楽集団

昭和44年度芸術祭参加

第10回 定期演奏会

〔演奏〕 日本音楽集団

〔指揮〕 横山千秋

〔客演〕 沢井忠夫・山本邦山
東京ゾリステン

〔客演指揮〕 荒谷俊治

The 10th Regular Concert

Oct. 31st 1969

7:00 p. m.

at ASAHI SEIMEI HALL

ENSEMBLE NIPPONIA

表紙題字は岡部蒼風氏（和文，欧文とも）

第10回定期演奏会によせて

清瀬保二

この集団が早くも10回目の演奏会を開くという。本当によくやってきたと思う。

第1回演奏会を第一生命ホールで開いたのを思い出す。すさまじい団員諸氏の意欲を感じたが、会后、地球がまだ固まらず、“いまだ形をなさず……”とでもいいたいような感想をのべて談笑したことを思い出す。

何回目か忘れたが、“おや”と思わずにはいられない団員諸氏の統一と、作品の落ちつき、またその目標がはっきりしてきたことを感じたし、漸次落ちつきと自信を感じた。遂にその努力の成果が認められて先般芸術祭奨励賞を得たことは、団員諸氏の全くの努力のたまものであり、改めてお目出度うを述べたい。

この集団のかかえた困難な問題は、また日本のかかえた問題であり、洋楽との対決、或は吸収消化といろいろ考えれば、いわば日本のどうしても避けられない、いわば宿命ともいえる難問題で、ただ音楽技法の研究だけでは解決し得ない問題があると思う。邦楽家は邦楽家として、洋楽家は洋楽家として、避けることの出来ない問題をかかえていると思う。この二つの分野の人が一致して“新しい日本の音楽”を開拓している集団というところに特色があり、また目的を果すにいい条件をもっているといえよう。

今後もよりこの目的を鮮明にしながら、努力を持続していかれることを希望する。

— 曲 目 と 出 演 者 —

1. 箏のための組曲 / 石桁真礼生

〔箏〕 坂井とし子・白根きぬ子 〔十七絃〕 宮本幸子

2. 詩 曲 ——独奏尺八のための—— / 長沢勝俊〈初演〉

〔尺八〕 宮田耕八朗

3. ディヴェルティメント / 佐藤敏直〈委嘱作品・初演〉

〔箏〕 白根きぬ子・沢井忠夫（客演） 〔十七絃〕 宮本幸子

〔三絃高音〕 杉浦弘和 〔三絃低音〕 坂井とし子 〔篠笛〕 望月太八

〔尺八〕 宮田耕八朗・古賀将之 〔打楽器〕 田村拓男・清水義矩

〔指揮〕 横山千秋

————— (休 憩) —————

4. 「序の曲」 / 三木 稔〈初演〉

〔尺八〕 横山勝也 〔二十絃箏〕 野坂恵子 〔三絃太棹〕 坂井とし子

〔弦合奏〕 東京ゾリステン（客演）

〔指揮〕 荒谷俊治（客演）

5. 子供のための組曲 / 長沢勝俊

〔箏〕 白根きぬ子・坂井とし子 〔十七絃〕 宮本幸子 〔三絃〕 杉浦弘和

〔琵琶〕 山田美喜子 〔尺八〕 山本邦山（客演）・宮田耕八朗・古賀将之

〔打楽器〕 田村拓男・清水義矩

— PROGRAMME & PLAERS —

1. SUITE FOR KOTO / ISHIKETA, Mareo

by SAKAI (Kt.) SHIRANE (Kt.) MIYAMOTO (17Kt.)

2. POEM FOR SHAKUHACHI / NAGASAWA, Katsutoshi

by MIYATA (Sh.)

3. DIVERTIMENTO \ SATŌ, Toshinao

by SHIRANE (Kt.) SAWAI (Kt.) MIYAMOTO (17Kt.)

SUGIURA (Sg.) SAKAI (Sg.) MCCHIZUKI (Sn.)

MIYATA (Sh.) KOGA (Sh.) TAMURA (Perc.) SIMIZU (Perc.)

YOKOYAMA (Cond.)

————— (Intermission) —————

4. PRELUDE FOR SHAKUHACHI, KOTO, SANGEN
AND STRINGS / MIKI, Minoru

by YOKOYAMA (Sh.) NOSAKA (20Kt.) SAKAI (Sg.)

TOKYO SOLISTEN (Strings.)

ARATANI (Cond.)

5. SUITE FOR CHILDREN / NAGASAWA, Katsutoshi

by SHIRANE (Kt.) SAKAI (Kt.) MIYAMOTO (17Kt.)

SUGIURA (Sg.) YAMADA (Bw.) YAMAMOTO (Sh.)

MIYATA (Sh.) KOGA (Sh.) TAMURA (Perc.) SHIMIZU (Perc.)

Kt. = Koto

17Kt. = Jūshichigen

20Kt. = Nijūgen

Sg. = Sengen

Bw. = Biwa

Sn. = Shinobue

Sh. = Shakuhachi

(初演曲について——作曲者のことば)

ディヴェルティメント

佐藤敏直

私は子供の頃、隣家のお箏の先生と、そこへ集まる生徒達の音をきかされて何年か過したことがある。いろいろな曲を何度か、下手なのから上手なのまできいたが、しめっぽい曲か、変に西洋くさくて音色と合わない曲が多く、あまり気に入ったものはなかった。一方、お箏の教室と一番近い私の家のピアノのある部屋では、私は毎日のようにピアノとたわむれたが、その響きや、音の多様さ、音楽の美しさなどの点で、わがピアノの方がはるかに魅力的である、と誇りに思った記憶がある。今でこそ、学校では不十分ながら日本民謡を歌わせたり、鑑賞教材に箏曲を使ったりするようになったが、私の小・中学校時代の音楽はほとんどドイツ、イタリアをはじめとする、いわゆる「洋楽」に明け暮れたわけで、さきのお箏の曲の印象と一緒にあって、いつしか、尺八、三絃、箏などの音楽は「音楽」ではないといった錯覚を起してしまった。

今私は、伝統音楽の中では、比較的自然的に形成されたものに、より開かれた人間の姿を感じずるが、それが社会的な背景など、さまざまな影響のために、多くの場合芸術的に充分発展するまでにいかなかった歴史を、代表的だといわれる作品の中にも感ずる。洗練されたといわれる江戸時代のもので閉ざされた音楽が多いと思う。

また、アンサンブルについても、伴奏や、効果などの形ではある程度在ったとはいえ、合奏体それ自体が独立して演奏するところまでには到らなかったわけで、このことは、もっぱら主観的な音づくりに頼った過去の奏者を作った一つの原因でもあろう。

それだけに今新しい作品を創り出す意義は大きい。私が思うに、その基本的な姿勢は、手法的に新しい角度から追求することだけでなく、閉ざされてきた「邦楽」を解き放たれた「音楽」にすることである。私達は西洋音楽から、卒直に、しかも自由に人間の叫びを表現することを学んだが、その本質は当然、日本の楽器にも与えなければならぬと思う。

さて、ディヴェルティメントは、そういうことを考える中で書いたものである。1楽章は、短調的に、2楽章は教会旋法的に、3楽章は五音階的にしてみたが、それは傾向であって、全体に極めて自由である。しかし音程は少し厳格に要求した。弦楽器や管楽器を書く習慣から抜けきれないせいか、つながる音がほしくて、尺八に比重がかりすぎたと思う。

一番知っている管の日本の楽器の前で幾度か非力の情なさを味わいながら作曲したが、音楽教育者や、作曲家のやるべきこの方面の仕事の多いこともまたつくづく考えさせられた。

詩曲 ——独奏尺八のための——

長沢勝俊

尺八はその一吹きのかなかに無限の生命力を宿しているとよくいわれています。たしかにその神秘性や精神性は否定することの出来ない重要な一要素ではあるでしょう。しかし尺八の魅力はただそれだけなのでしょうか。我々の伝統のなかにうたいつがれてきた尺八は未完成的なものではあってもっと潑刺と人間の歌を歌ってきたはずです。私はこの詩曲のなかで尺八本来のもっている美しい音色を生かしながら現代の歌を歌おうと試みました。

「序の曲」

三木 稔

この演奏会上演する曲として、私をはじめは1964年、集団の第一回定期のために書いた「絃と日本楽器のための協奏曲」を考えていました。そしてステージの制約などもあって、小さな改作を行いたいと希望しました。ところが何年ぶりにひろげたスコアの上での解体作業は難渋を極め、5年前、日本の楽器に対して未成熟だった私のイデオムを現在のそれにつなぐことは、いたずらにマチエールの混乱を招くばかりだということに気がつきました。

この曲は当初の意図と違って、全く旧作を葬り去りそれをアンチテーゼとするところから出発することになってしまったのです。旧作にあきたら

ないということはよくあることですが、その断片にすら思いを残すことがなかったというのは始めてです。

しかし、透明な持続音で象徴される絃楽器群（4・3・2・2・1編成）と、個々の音の周囲に微細な変化音を含む代表的な日本の楽器（尺八・二十絃箏・太棹三絃）との接点を探るという意図そのものは5年前と全く変わっていません。

箏のための組曲は、1947年に作曲された。曲は時間的にほぼ等しい三つの楽章から成り立っている。今年、NHKの録音（演奏は邦楽四人の会）に際して、部分的に手直しが行なわれた。

「この曲は、私の箏のための音楽としては第2曲目にあたる。第1曲は、独奏箏と箏群（箏4部各3人と十七絃2人）のためのコンチェルトで、鈴木嘉代子さんの依頼によって作曲した。私も箏に興味を持ってはいても、まだその技法など詳しくは知らない頃で、鈴木さんがわざわざ箏を持ち込んで演奏しながらいろいろと説明して下さいました。

第2曲のこの箏のための組曲も、箏の音色や技法などについて、適確につかんで書いたというよりは、たまたま箏という楽器に、その時の楽想をたくした作品である。それでも、3人の箏のアンサンブルの音色は、どうしても箏の伝統的な音色——それは私自身のもつ潜在的な、箏の音色へのイメージでもある——と結びついてしまい、旋法もついつい、伝統的なそれに引っぱられていってしまった」（作曲者のお話から）

「序の曲」に登場する二十絃箏は、これ迄室内用の楽器であった箏を、演奏会場用に生まれ変わらせたものである。その構造上のポイントは、

○絃の数を2Cに増して全音階的に配列し、特に中、低音域を増強

○絃の間かくをややせばめ、C、Gの絃に着色絃を使用（黄色）

○糸の巻取機およびダンパーを装備

○音量増強のために開孔部を拡大

○立奏台を改良

などである。これによって、

- 音域、音量が拡大されて表現能力が倍増した
- 原則として調絃を固定するため、今後は曲ごとに変る調絃のための無駄な労力を省くことができる
- 全音階的配列のため、五線譜による記譜、演奏が合理的になる
- 楽器の機構が合理化されたので、調律も容易になる。

などの新しい利点が生まれた。しかし、従来の箏の特長は少しも失なわれていない。

二十絃箏は、従来の箏にぴったり当てはめて作られた伝統音楽の演奏には、正直いって向いていない。この楽器は、現代および将来の音楽のための楽器である。

子供のための組曲は、1964年の初演以来、私たちの手で幾度も再演、放送され、また宮城室内楽団、福岡学生邦楽連盟など他の演奏団体によっても上演されてきた。この私たちの骨肉になりかかっている音楽を、このたびは指揮者なしで合奏を行なうことになった。これは、日本の楽器のアンサンブルのあり方を、別の角度から追求してみようという、私たちにとって初めての試みである。

「序の曲」に、客演指揮者として、荒谷俊治氏をむかえた。これは、第5回定期に秋山和慶氏をむかえて以来の事である。また、前回の堀悦子氏につづいて、作曲の委嘱を佐藤敏直氏にお願いして、また一つ新しいレパートリーを得ることができた。演奏の客演としては、箏の沢井忠夫氏、尺八の山本邦山氏のお二人がある。私たちの運動が私たちだけのものではなく、日本の音楽界すべてのものであることを願う心から、また私たちの創作、演奏がマンネリズムにおち入らないためにも、これからも常に委嘱、客演を私たちの演奏会の一つの重要なポイントとして考えて行きたい。

鞍掛昭二

（追記）

ちらし、その他で「合奏協奏曲」と表記して参りましたが、作曲者のたつての希望によって「序の曲」と、表題が変更になりました。ここに訂正とおわびを申し上げます。

美しき青年の面ざしよ

石丸 寛

日本音楽集団の中の幾人かは個人的に知っておりましたが、先日NHKで初めて集団の指揮をする機会を与えられて、噂に違わぬその卓越した技術、強靱なねばりと高い意欲に驚かされ、集団に対する新鮮な魅力を感じてファンの一人になってしまったのでした。私の指揮した曲は長沢勝俊氏の作品でしたが、前々から私の興味を深いものにさせている三木氏の作品や集団の演奏家の資質からもあわせ判断して、この集団は我国伝統の音楽における生命力をしっかりと認識して、それを踏まえた上に、しかも若々しくフレッシュな開発の躍動を続けていることがありありと察せられる素晴らしい団体であるということでした。

日本の音楽という名題をどのように受取り、どのように整理し、どのように発展させてゆくかは難かしい問題です。邦楽といわれているものと洋楽とを安易に結びつけることではないことが分かっていても、実際には結びつける作業にすら失敗しているものが多い未満の世界です。

日本音楽集団も第10回定期を迎え、今回も又意欲的なプログラムを組んで私たちに期待の胸を躍らせます。今夜の演奏では完成期を迎えた青年の輝やかしく、りりしい面がうかがえることと楽しみにしております。

共に手を携えて

北原 篁 山

日本音楽集団が第10回定期演奏会を開かれることを同じ道を進んできた、邦楽「4人の会」の一員として心からお祝い申し上げます。

顧りみれば12年前に邦楽「4人の会」が発足、つづいて生れたいろいろなグループと共に、邦楽の世界にそれぞれ新風を吹き込み、作曲家の協力を得て今日のような現代音楽の目覚ましい展開を見せる時代に至った。

日本音楽集団は邦楽「4人の会」その他の少人数の演奏団体では試み得なかった大きな編成と多種類の邦楽器奏者をメンバーとして、今から6年前に発足されたことは、上記の経過から見て生れる可くして生れた存在であったと思う。そのメンバーとして多数の演奏家だけでなく、作曲家の参加を見たことは、これまた今までには見られなかった新しいグループの形態といわねばならない。

その発足以来の目ざましい活動はすでに知られており、ユニークなレパートリーの数々を発表し邦楽器による現代音楽の世界に大きな足跡を残してきたことは、誠によろこばしいことである。

幸い日本音楽集団と邦楽「4人の会」のメンバーは、昔から親しい人も多く、いろいろな仕事を共にする機会も多い。これからも手を携えて音楽界の前進のために努力して行きたいし、また演奏団体としてお互いに良い面は吸収し合い、反面きびしい批判や意見も交換して行きたいものである。ともあれ第10回の定期演奏会が将来に向っての大きな飛躍の会となることを心から祈って居ります。

閉ざされた垣根をとり払って

佐々木 光

戦後の日本の文化状況のなかで、日本の民族的な遺産をまっとうな形で現代に継承・発展させるという意識的な活動はたいへんうとんじられてきた観があります。それは外来音楽を広く吸収することが第一義的になった歴史条件からきていることもありましようが、1960年代あたりからようやく先進的な音楽家の努力によって着手されるようになりました。これは日本の音楽の戦後における民主的・自主的發展のため、きわめて大きな動きといえるのではないのでしょうか。

日本音楽集団の結成と、その活動にそうした意味において、作曲家と演奏家が、固く閉ざされた“洋楽”と“邦楽”の垣根をとり払った「場」で新しい自分たちの音楽を生みだすための努力を傾けていることはひじょうに大きな意味をもっていると思います。

しかし、先進的な活動だけに多くの困難が伴うというのはやはり避けられないことでしょう。しかし「集団」がそのなかでねばり強く、強い意志と強力な実践力をもって活動し、第10回の定期演奏会をもつことになったことに敬意を表さずにはいられません。

このうちは日本の聴衆にたんに物珍らし気に聴かれるだけではなく、すぐれた作品を数多く“定着”させるための努力とともに、邦楽器によるアンサンブルの新しい可能性の世界を一步、一步、けって焦ることなく追求してゆくことを期待します。

アンサンブルの完成を

芝 祐 靖

一昨年でしたかモントリオールでの博覧会（EXPO）に日本音楽集団の方々と一緒に参りましてその縁で集団の演奏会に二・三回出演させていただきました。それ以来すっかりファンとなってしまいました。

すばらしい作曲家と演奏者がよくもメンバーになったのだと感心しています。それぞれ違う立場の人が同一の時間をさくだけでも大変なことなのに……そこにはどんな夢や目的があるのでしょうか。集団の初期の目的はわかりませんが現在は「これからの日本音楽の進むべき道はこれだ！」と言う意気込みが感じられるのです。集団の演奏によって日本楽器の限界が大幅に広げられたことは事実です。可能性を追求されて楽器の表現力が豊かになれば、メンバー以外の作曲家もどしどし作品を寄せてくれることでしょう。そして多くの人々が持っている観念的な「日本音楽に対するイメージ」を打ち破ることができます。

現在の集団に何か注文を出したいと考えたのですが個々のプレーも作品もすばらしいものばかりで注文のつけようがありません。それでも強いて申せばアンサンブルの経験不足があるように思えます。日本楽器におけるアンサンブルはまだまだ歴史も浅くまた個性の強い楽器の集まりであるため残念ながら西洋音楽の敵でないようです。最近の作品には複雑なハーモニーの連続や超技巧のフレーズがいたる所にあって演奏者の努力は大変でしょうが、その上に絶妙のアンサンブルが出来ればどんなにすばらしいことでしょう。集団の方々なら西洋音楽を上まわるものが必ず出来ると信じます。

現在の日本の音楽体系では無理でしょうが、将来、集団と同じような演奏団体が洋楽の管絃楽団なみにふえるのを私は夢見ています。

集団は新しい方向での芸術的完成をめざしてパイオニアを宣言したのですから、暗やみの中の日本音楽に一筋の光をはなって下さい。

常に前進する芸術家たち

清水 脩

最近の日本音楽集団の活躍には目を見張るものがある。第一に、その若々しさである。第二にはその創造性である。あえて第三をつけ加えると、その前衛的エスプリである。いうまでもなく、これまで数多くの優れた作品を発表した。しかもそれらはすべて、かつてわが国に存在しなかった形態の音楽で、このグループの評価を正しくするには、ここの所を押さえてかからなければ無意味である。

日本には、日本の楽器があり、日本の音楽がある。日本人の骨肉となって伝承されきたったものであるのは申すまでもない。しかしその骨肉は今日決して健康な状態にあるとは言いがたい。おとろえかけたそれをどのようにして回生させるのか、日本の音楽家は誰も考えないではおれない。芸術家の感覚はそれぞれ個性的な道筋でそれをとらえようとしている。そして誰一人として同じアプローチの方法のものはいない。しかし、或る種の共通理念までも皆無とはいえない。日本音楽集団は、それに属する個々のメンバーの間で烈しいぶつかり合いをしながら、一団となって共通の目標に向かって進んでいる。ではその共通の目標は何かと問われても、明確な答えを出すことは難かしい。不可能ではないにしても、もし無理強いに答を抜き出したとき、それはむなしい形骸にしかすぎないだろうし、もしかりに回答として提出されたとしても、その時にはもうかれらはそこに留まっていないで、さらに先へ進んでいる。芸術とはそういうものであり、芸術家とはそういうものである。日本音楽集団は、まさにそのような芸術家のあつまりではないだろうか。

集団と私

鈴木 一郎

音楽集団の方々とはじめてご一緒になったのは1967年夏のモントリオール万博の際、日本民族舞踊団を組織して、米国、カナダをまわった時のことでした。邦楽というものを殆んど知らなかった私は、この時にはじめて色々教えていただき、日本の楽器の面白さを発見したのです。

その後、何回か集団の演奏会や会合にでてみてこのグループが非常に真面目な努力を積み重ねておられることを知り、その中に私の考えている「新」―「旧」、 「東」―「西」といった日本にある多様な要素が、新しい形で凝縮され、作品化されていることがわかってくると、グループに対する関心はいやが上にも増して来たのです。もう三木さんの「パラフレーズ」や、長沢さんの「子供のための組曲」などは、耳に親しいものになってきています。

今年はコロムビアからレコードもできるときますし、文部省からも研究助成金がでるとかで、これまで苦勞してここまで盛り上げられた集団のメンバー各位は、どれほど喜んでおられることでしょう。全く打算を超越してやってこられたご努力が、次第に形をとりつつあることは、本当に喜びにたえません。どうか今後の皆様のご精進を心から祈る次第です。

世界への羽ばたき

富 樫 康

日本音楽集団の定期演奏会も、今回で既に10回を迎えるという。このグループが発足したのは、つい最近のここのように思っていたのに、調べてみると1964年だから、もう6年経過したわけである。過ぎ去った歳月は早いものである。当事者たちは、はじめ自分たちの仕事の実を結ぶかどうか甚だ不安をいだいていたそうである。それは未開拓の道を、新しく切りひらこうとする者の誰しもが持つ共通の不安である。要は聴衆がついてきてくれるか、社会が彼らの仕事を認識してくれるかにかかってくる。

しかしその不安は、こんにち漸く安堵の色に塗れかえられてきた。

伝統を破る時は、必ず強い抵抗に突き当たる。だが、それが真に芸術史的に新しい意義と必然性をともなっている場合は、必ず始めから何人かの支持者がいるものである。そして芸術家が、絶えまなく、自己の主張を守り続けて仕事して行く限り、支持者の数も増加してゆく。こうして始めに受けた抵抗の力も次第に弱まって行くものである。

日本音楽集団の業績は、現在丁度その段階に到達した時期といえる。そして国内の支持層が増加する一方、これが日本の音楽史上の出来事として止まるばかりでなく世界の音楽史上の出来事としての羽ばたきを見せようとしていることも、第三者的立場にいる私には感じられるのである。

ひとこと

中 島 靖 子

従来、邦楽器の合奏団は、師弟という従のつながりから出発したものが、その殆んであった。最近横のつながりから始まった幾つかのグループが出来てきたが、その中でもこの日本音楽集団は独立した個々の音楽人の集りとして、全く他に類をみない存在だ。男性が圧倒的に多い（しかも男性のみでない……）、各人の仕事の分野が分れている、専門家みの集りである。etc。

こうした事から未来の日本の音楽の担い手として、このグループに限りない融通性と可能性とを期待することが出来る。一時期、演奏家の主張をもっと強く押し出さないと作曲家の実験道具に終わってしまうのではないかと、危惧した時もあったが、この春、三木稔氏の作品を野坂恵子さんが独奏された時の感動で完全に吹きとばされた。（註「箏・譚詩集」）この素晴らしい音楽は集団の長いきびしい、そして楽しい歩みなくしては決して生まれなかったであろうと……。

更に次への発展を期待して。

新しい伝統を期待

中能島 欣 一

現在催される演奏会には、全く新しいタイプのもの、飽くまで伝統を墨守するもの、或はその中間に行くものと、この三つが並び立っている。その第一の部類に位し、特に新鮮で気鋭に満ちているのが、日本音楽集団であることに異論は無いと思う。然も全員古いバックから抜け出て、全く自由な立場で内容的にも、いきいきと活動されている所に、大きな魅力を感じ、また一面羨ましくも思うのである。

この集団を含めて、今日のような自由奔放とも言える音楽活動を観るとき、ふとかつての「新日本音楽」時代を思い起こす。戦争の前後を通じ私達は、それに対する反省といった事を経験した筈である。無論「新日本音楽」とは根本理念の異うであろうこの集団が、いろいろの実験——聊か突飛な一提案として、特殊な方法のもとに古典に取組むというようなこと——をも経て、やがて確乎たる、然も新しい一つの伝統を生み出した時の素晴らしさを、大に期待しているものである。

もっと Adventurous な試みを

長 広 比登志

今夜で10回目の定期演奏会を迎え、同時に結成6周年になるこの「日本音楽集団」に、あえて愚言を提ずるとしたら、わたくしはまず“adventurous”な試み、あるいは行動をとりたい。いまさらこんなことをいってみてもはじまらないほど、このアンサンブルは adventurous な試みをずっとしてきている。第1回のプログラムから、今夜にいたるまで、毎回それをうかがいしることができる。そしてその試みは、trial and error ということばで不当に批評されたこともあったようであるが、いわゆる「現代邦楽」の演奏団体の中でも、このグループほど adventurous な可能性を秘めたものはない。

こういう試みがゆるされなかった伝統芸術の社会とこんにちの社会とでは、音楽を享受する聴衆の音楽体験がことなる。過去の伝統遺産をうみ出した人々の共有感覚は、もはやわれわれには残念ながら把えにくいものとなっている。この「日本音楽集団」が、伝統芸術の中にはなく、もっと日本人の音楽性の原点に眼を向け、その音楽性の中にひそむナマナましい「生の衝動」を探り出そうとしている方向に対して、われわれは時代を乗り越えた共有感覚をもつことが出来る。その方向が、とりもなおさず1曲1曲のadventurous な創造意欲に示されているといえよう。trial を恐れてはならないし、それを抑圧してもいけない。「日本音楽集団」の1人1人が、さらに一尺敢然とその方向に向ってほしい。

新しい血の注入を

丹羽正明

日本音楽の伝統に取り組んできた日本音楽集団の仕事は、単なる思いつきや時の流行に従って、日本音楽の素材をアクセサリーのように“借用”したり、その情緒を薬味のように“振りかけ”したりするのはちがって、まさに本格的な現代音楽創造の歩みであったということができましよう。

第10回の定期演奏会を迎えて、私に一つの提言をさせて頂くとすれば、それは、ここらで、更に新しい血を注入して欲しい、ということです。日本音楽集団の特色は、グループの中に、演奏家だけでなく、指揮者も作曲家も、そして企画者も、すべてがメンバーとして加盟していることにありました。そのため、一つの主張を集約した形で遂げることが出来るという大きな利点をもっていたわけです。しかし、このことは、反面では、純血種の弱さにも通じる体質上の欠陥を生み出しかねない弱点ともなり得るものでしょう。

たとえば、オーケストラ活動を例にとってみても、常任指揮者と楽員という強固な結びつきを保ちながら、一方では、客演指揮者を招き、外部からソリストを立てて、より多面的な活動を生み出す努力を、どこの団体でも行なっています。このやり方が、団体自身にとっても視点の拡大に役に立ちますし、聴衆にとっても、より広範囲の体験を得る結果をもたらすという意味で、広く行なわれているのでしよう。

日本音楽集団におかれても、メンバーとしての主張を守り、従来の固い結びつきをより以上に強めて行くと同時に、いま申したような外側へ向っての発展を実現するために、新しい血の注入を考慮されることを望むものです。

今後一層の御活躍を祈ります。

独奏楽器としての発展を

村岡実

第10回定期演奏会おめでとうございます。発足当時のあの熱っぽいひたむきなパイオニア精神を今日まで継続、発展させてこられた皆さんの努力に敬服いたします。

元来、独奏楽器である和楽器だけで、オーケストラを作り、新しい日本の音楽を創りだそうということは、たいへんな難行苦行であり、特に、作曲面でむずかしい問題が多々あることと思いますが、敢えて私の希望を申しあげるならば、各楽器の独奏楽器としての特質を十分に発揮できるような曲、それも従来の邦楽の演奏会にみられなかった、現代のリズムと音感を使ったバイタリティある楽しい曲（たとえば、モダンジャズの即興的要素を取り入れた曲）の作曲、演奏を、大いに試みてほしいと思います。

集団の皆さんの今後のご発展を祈ります。

村松道弥

徳川幕府300年の鎖国政策は、東西文化の交流をさまたげたが、明治維新の開国によっても、その反動から欧米一辺倒の文化政策がとられた。学校教育に於ても音楽は西洋音楽一辺倒となり、日本の伝統的な音楽は邦楽として、一部の人の趣味として、存続すると言う間違った文教政策によって、今、明治100年となった。この間、音楽といえば西洋音楽としか考えられない様な時代が永く続いた。日本の伝統音楽を中心に発展、改良し、西洋音楽の長所を取り入れて、新しい日本の音楽を創ると言う事が永い間忘れられて、両者の間に断絶があった。ようやくそれに眼醒めた、作曲家と邦楽の演奏家によって正しい方向が最近各方面に起り、それらの作品や演奏が国内のみならず、国際的にも評価を高めつつある事は、永かった冬が終って希望の春を迎えた観がある。

この動きの先駆をなした、日本音楽集団の関係者の努力は高く評価されなければならない。今回第10回の定期演奏会を、芸術祭参加公演として開催する事に成った。期待される作品と、現代第一線で活躍する演奏家の顔振れを拝見して、当日の演奏が必ずや多くの成果を納めるものと期待するものである。

唯是震一

この度は第10回目の定期演奏会にあたる由承りました。心からお祝い申し上げます。実はチラシの中央に書かれた横文字を読むまでは日本音楽の集団なのか、日本の音楽集団なのかわかりませんでした。メンバーの皆さまも日本のあるいは日本人の音楽集団という名称を認識していらっしゃるでしょうか。

作曲家、指揮者、演奏家と三味一体となっている点は現在活躍している音楽団体でも数少ないことと思います。しかも演奏家の内訳も一流一派に片寄らず、日本音楽界を昇華したように、東西音楽の二分野で次代を担う宿命にある中堅の有識者と経験者が勢揃いという点も、永続性のある理想的な組織のある団体として、今後の活躍を期待するに充分なものがあります。

今まで古典とか伝統の旗印を立てて来た日本の音楽も、元をたただせば東洋音楽を中心とした外来音楽を日本的に変容同化して作られた音楽の総称のように考えることができます。日本に培われて明治百年の歴史をもつ、西洋からの外来音楽も今や日本独自の成果を世界の人々から賞讃と驚異の眼で認められています。徳川時代までに完成された東洋外来音楽同化作業はこの辺で一応句点を打ち、これからはそれを基盤として西洋外来音楽の同化作業が無意識の裡に行われているのが日本音楽の現状ではないでしょうか。このような経路を辿ると、あなた方の日本音楽集団の音楽する立場は非常に責任のあることで、また多くの有識者が期待すること大だと思えます。メンバーの一人一人がもう一度日本(人)の音楽集団という旗印を認識して、相互の人権や経済面その他の困難を乗り越えて、新しい日本音楽の創造と第二期の伝統音楽成就の目標に向かって捷徑を求めて頂きたいとお願い申し上げます。

聴衆とのかかわりあいを大切に

結 城 亨

今まで洋楽器ばかりのレコード録音をやってきた私にとって、今回の日本音楽集団の録音は大変印象深い、そして新鮮な仕事の一つとなりました。というのは、初めて手がけた邦楽器の実に微妙な一音一音のニュアンスや、極めて多彩なハーモニーに魅せられた——ということももちろんですが、集団の方々が本当に懸命に日本の楽器による音楽の探究を行っている、その情熱がじかに肌を感じられたからでした。

音楽集団のように独自の新しい活動を推進してゆくには、常に新しい問題意識を抱えながらいろいろな面から“芸術の今日性”ということに対してアプローチしてゆく必要があると思いますが、作曲家、演奏者、ディレクターという構成はその点理想的でしょう。あとは意欲的な仕事ではややもすると忘れがちな聴衆とのかかわり合いをより密にして、素晴らしい音楽創造を推進されるよう切望いたします。

定期演奏会記録

1964年4月 メンバー15名をもって「日本音楽集団」を結成。

〃 11月 第1回定期演奏会（芸術祭参加）第一生命ホール

〔曲目〕

尺八三重奏曲／清瀬保二

千鳥の曲／二代吉沢検校

弦と日本楽器のための協奏曲／三木（初演）

協奏三章「京琴」／元橋（初演）

子供のための組曲／長沢（初演）

くるだんど／三木

《客演，東京混声合唱団ほか》

1965年10月 第2回定期演奏会（芸術祭参加）朝日生命ホール

〔曲目〕

日本楽器のための前奏曲／三木（初演）

子供のための組曲／長沢

オーボエと日本楽器のための断章／元橋（初演）

三つの阿波のわらべ歌／三木

愛の架け橋／長沢（初演）

《客演，吉水洋（オーボエ），木村宏子（アルト），山本邦山（尺八），日本合唱協会
ほか》

1966年6月 第3回定期演奏会 日仏会館ホール

〔曲目〕

箏と三絃のための二重奏曲／杉浦

本曲「下り葉」／津軽根笹派所伝

子供のための組曲より1，4，5章／長沢

二面の箏のための音楽／入野義郎

二つの牧歌／三木（初演）

協奏三章「京琴」／元橋

1966年10月 第4回定期演奏会（芸術祭参加）第一生命ホール

〔曲目〕

組曲「人形風土記」／長沢（初演）

詩経より「緑衣」／船川利夫（初演）

笛と琵琶，小鼓とによる「対話」／元橋（初演）

古代舞曲によるパラフレーズ／三木（初演）

《客演，豊雄秋（笙），中川とよ子（唄），増田睦実（ソプラノ）ほか》

1967年6月 第5回定期演奏会 日仏会館ホール

〔曲目〕

管弦楽組曲第2番より／バッハ＝音楽集団編曲

古代舞曲によるパラフレーズ／三木

ともし火に寄せて／芝祐靖

子供の四季／長沢

《客演，秋山和慶（指揮），増田睦実（ソプラノ），池田明良（バリトン），東京荒川

少年少女合唱隊》

1967年11月 第6回定期演奏会（芸術祭参加・奨励賞受賞）日仏会館ホール

〔曲目〕

六重奏曲／伊藤隆太

日本楽器による組曲「面」／元橋（初演）

三群のための形象／三木（初演）

三絃と日本楽器によるディヴェロプメント／長沢（初演）

《客演，芝祐靖（竜笛）》

1968年3月 日本楽器による現代音楽の夕べ・国際文化振興会主催 日経ホール

〔曲目〕

メドレー形式による伝統音楽（内容省略）

比良／宮城道雄

組曲「面」より・狂言面，女面／元橋

子供のための組曲より・1，5章／長沢

古代舞曲によるパラフレーズより・誄歌，前奏曲／三木

1968年4月 第7回定期演奏会 日仏会館ホール

〔曲目〕

尺八・三絃および二面の箏のための四重奏曲／間宮芳生

尺八のためのコンポジション／元橋（初演）

組曲「人形風土記」長沢

前奏曲集第1集より・亜麻色の髪の乙女，吟遊詩人／ドビュッシー＝三木

古代舞曲によるパラフレーズ／三木

《客演，芝祐靖（竜笛），瀬山詠子（ソプラノ）》

1968年11月 第8回定期演奏会（明治百年記念芸術祭参加）朝日生命ホール

〔曲目〕

尺八三重奏曲／清瀬保二

日本楽器のための二つの楽章／元橋（初演）

日本民俗詩より「恋の歌」／長沢（初演）

箏四重奏曲／長沢（初演）

はばたきの歌／三木（初演）

《客演，日野てる子（アルト），荒木宏明（バリトン），芝祐靖（竜笛），特別提携

出演・日本合唱協会》

1969年6月 第9回定期演奏会 朝日生命ホール

〔曲目〕

トルソ／広瀬量平

三つの断章／中能島欣一

日本の楽器による＜コントラスト＞／堀悦子（委嘱作品，初演）

四群のための形象／三木

三絃と日本楽器のためのディヴェロPMENT／長沢

《客演，岩本忠生（チェロ），芝祐靖（竜笛）》

1969年10月 第10回定期演奏会 朝日生命ホール

〔曲目省略〕

お知らせ

◎日本音楽集団のレコードがコロムビアから発売されました。ロビーで販売中です。

(曲目=古代舞曲によるパラフレーズ/三木稔, 尺八三重奏曲/清瀬保二。ステレオ。

定価 2,000円)

◎別紙の通り, 来年度の定期会員の受付を行なって居ります。御申込はロビーの定期会員係まで
お願い致します。

◎野坂恵子第2回リサイタル 11月7日(金)7:00 p.m. 日経ホール(二十絃箏による)

◎第11回定期演奏会 '70年4月22日(水)7:00 p.m. 朝日生命ホール(曲目未定)

第12回定期演奏会 // 10月21日(水)7:00 p.m. 同上

◎横山勝也は, 11月に, クリーヴランド交響楽団およびボストン交響楽団(指揮小沢征爾), 12月にアムステルダム・コンセルトヘヴォー(指揮ハイティンク)と, ノヴェンバーステップスを演奏します。

日本音楽集団

(箏・三絃)	坂井とし子	(尺八)	古賀将之
(箏)	白根きぬ子	(打楽器)	田村拓男
(箏・三絃)	野坂恵子	(打楽器)	清水義矩
(箏・十七絃)	宮本幸子	(指揮)	横山千秋
(琵琶)	山田美喜子	(作曲)	長沢勝俊
(三絃)	杉浦弘和	(作曲)	三木稔
(篠笛・能管)	望月太八	(作曲)	元橋康男
(尺八)	横山勝也	(コンサート ディレクター)	鞍掛昭二
(尺八)	宮田耕八郎	ゲストメンバー(竜笛)	芝祐靖

日本音楽集団第10回定期演奏会・1969年10月31日(金)午後7時開演

新宿西口 朝日生命ホール

マネージメント 東京演奏家協会 〒150 渋谷区恵比寿 4-4-5 電話 (473) 4413

全世界の注目を集める話題盤！
尺八・三味線・琴・琵琶 他、和楽器による作品集

現代日本の音楽 (3)

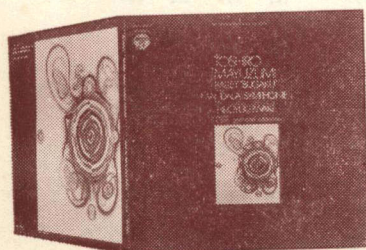
三木 稔

古代舞曲によるパラフレーズ

清瀬保二：尺八三重奏曲

横山千秋指揮
日本音楽集団
横山 勝也(尺八-1)
古賀 将之(尺八-2)
宮田耕八郎(尺八-3)

☆ OS-10052
30cmステレオLP ¥2,000

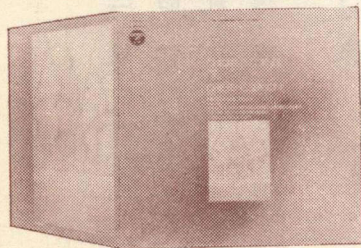


現代日本の音楽(1)

黛敏郎：バレエ音楽「舞楽」(1962)／曼茶羅交響曲(1960)
☆岩城宏之指揮 NHK交響楽団 ▶OS-10050 ¥2,000

現代日本の音楽(2)

間宮芳生：合唱とオーケストラのためのコンポジション 子供の領分
三善 晃：合唱組曲 こどもの季節
☆若杉 弘指揮 日本合唱協会他 ▶OS-10051 ¥2,000



現代日本の音楽(4)

間宮芳生：ヴァイオリン協奏曲(1959)／ヴァイオリン、ピアノ、
打楽器とコントラバスのためのソナタ(1966)
☆江藤俊哉 日フィル 他 ▶OS-10053 ¥2,000(11月10日発売)



レコードは
コロムビア

